

人はどのように生きればいいのか

二〇二一年五月二十六日

バイブル・サービス

矢 口 洋 生

自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。

(マルコ 八章三五節)

人はどのように生きればいいのか？ そのようなことを意識して聖書における「生」や「命」の考え方に焦点をあててみたい。

どの言語でも、話す人々の関心事が高い事柄については複数の語があつてそれぞれ異なるニュアンスをもつ。新約聖書には「生」「命」を表す語が四語登場するから、その時代の人々にとってそれが重要な概念だったと想像できる。上の聖書箇所では「命」という日本語が訳語として採用されているが、原文のギリシャ語においては「プシユケー」が使われている。ギリシャ神話の女神に語源をもつこの言葉は息、命、心、魂、などを意味することができる。新約聖書の文脈においては、類義語のプネウマが生命体としての「命」を指すのに対して、プシユケーは人間の生の

人はどのように生きればいいのか

源としての「命」に力点があるように思われる。ちなみに、プシュケーに関する学問（ロゴス）は、プシュケー＋ロゴスであって、英語読みすると多少発音が変化してサイコロジーとなる。日本語では心理学と呼ばれる。

人には自己保存の本能があるから、自分の命を救おうとすることは当然と考えられる。それが人の本性なのだから。ところが、上記マルコ八章のイエスはそれを否定する。「自分の命」を求めることが否定されている。むしろ、「わたし（つまりイエス）」と「福音」のために命を尽くすことが求められる。その場合、「わたしのため」はいいとして、「福音のため」に命を失うとはどういうことなのか。

イエス・キリストの公生涯は「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」という宣言によって始まる（マルコ一章一四節～一五節）。神の国が、今日の国際政治上の主権国家の概念に当てはまらないことは言うまでもない。つまり、イエスはタンザニアやベラルーシのような具体的国家の登場を宣言したわけではない。神の国は、神の支配や神の統治を示す表現なのである。マタイ福音書では天の国という用語が使われている。神の支配が近づいたという声明は、従来の支配に取って代わる支配を予告したものである。支配の主体が変わるとするなら、当然、支配の原理も変わる。支配下の民は、新たな原理に則った新たな生き方をしなければならない。場合によっては、価値の転換が必要となる場合もある。それまで常識とされたことが通用しなくなることもある。イエスの宣言によって始まった価値転換を「ガリラヤ革命」とか「逆さま国」の登場と呼ぶ神学者もいるほどである。上記マルコ八章三節やマタイ六章三一節以下の「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか」と言っている。それは異邦人が切に求めているものだ……」などの強い表現は、そのような背景を踏まえて理解されるべきだろう。しかし、そうは言っても人の本性は変わるものではないし、イエスの言葉、ひいてはキリスト教の教えは実行不能の理想論、空言にすぎない。人は「自分の命を救いたいと思う者」であり、究極的には自分に奉仕する者、自分

がすべてに優先する存在だ、という反論も聞こえてくる。体験上、必ずしもそうではないと主張したい。

例えば料理をする人を考えたい。もちろん自分自身のために材料を念入りに選び、豪華な料理を作って盛り付け、それを食することもあろう。しかし、多くの人の話を聞くと、喜んで食べる他人がいてはじめて料理は作り甲斐のあるものとなる。自分一人の時は、簡易に食事をすませる料理人の方が多いと思う。料理とは、自分以外に食べる人がいて成り立つ文化的営みなのではないか。

同じことが仕事にも言えないだろうか。むろん、自己の責任を全うするため、自分のやりがいとして仕事を行うことはある。しかし、辛くても仕事をし続けることができるのは、関係する他者がいるから、支えてくれる人がいるから、あるいは、支えなければならぬ人たちがいるからではないか。人は、他者との関りを通して自己を確認し、そこにやりがいや生きがいを見つけないか。東京オリンピックの参加者が異口同音に周りの人たちへの感謝を表したのは、個人競技であつても個人だけで活動している人はいないことを示している。

鏡の原理を思い出す。自分の顔を「直接」見ることはできない。見ようとしても見られない。人間には不可能なのだ。自分の顔は、鏡という「異物」に映してしか見ることができない。鏡じゃないとしても、写真や映像等の「異物」に転写された顔を見ることしかできないのだ。結局、鏡なしには自分の顔すら見られないのと同じように、人間は、社会や他者がなければ自分が生きているか死んでいるかも確認できないのだ。外界や社会、他者と遮断された状態においては、人間は存立し得ないのだ。自分の顔すら見えないように、自分の存在が見えなくなるからだ。自分以外のものとの「繋がり」は人間存在の基本要件なのだ。このように立論できるとするなら、次の問題は「繋がり」をどう深化させるか、ということに尽きるだろう。

マルコ八章三五節は「繋がり」の視点から理解すべきである。自分のためではなく、イエスならびに神の国の福

人はどのように生きればいいのか

音と繋がって命を全うすることこそが大切なのである。神の国が、神の支配を表す鍵概念であることは先に述べたが、福音書全体を通して浮かび上がるのは、教えと生き方を通して神の国を体現するイエスの姿に他ならない。例えば、神の国の最も大切な掟を語るイエスである。第一に、神である主を……心を尽くし精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして愛すること、第二に、隣人を自分のように愛すること、を説いた（マルコ一二章二八節以下）。例えば、「あなたの御心が行われますように」と祈りながら十字架の死に至るまで神に従順であることを貫き通したイエスの姿である。

福音書に通底するイエスの姿は一貫していて、そこに固有のキリスト教的価値観が浮かび上がる。自分への集中、自分の命への集中は救いをもたらさない。自己目的的に物質、金銭、地位、名誉を追求する生き方は人を幸福にしない。良き人生にはつながらない。むしろ、神の国の供給者である天上の神と、地上の同伴者である隣人との「繋がりに」の中で、いやその「繋がりに」を通してのみ、救いと呼べるもの、永遠の命と呼べるものが人に与えられるのだ。

（本学学長）